第４学年　道徳学習指導案

指導者　田杭　直樹

１　主題名　「友達のことを考えて」【Ｂ（９）友情・信頼　　小学校中学年】

２　資料名　「絵はがきと切手」（出典：「４年生のどうとく」文溪堂　一部改作）

３　主題設定の理由

（１）ねらいとする価値

本主題は、「内容項目Ｂ　主として人との関わりに関すること」の「友情、信頼」の中学年、「（９）友達と互いに理解し、信頼し、助け合うこと」をねらいとしている。これは、低学年の「（９）友達と仲よくし、助け合うこと」から発展し、高学年の「（１０）友達と互いに信頼し、学びあって友情を深め、異性についても理解しながら、人間関係を築いていくこと」に発展していく。

友達とは、人生を豊かに生きるうえで欠くことのできない存在である。自分が困っているときには、助けてくれたり、なぐさめてくれたりする。また自分が過ちを犯したとき、諭し、励ましてくれる存在でもあろう。一方で、友達の過ちをおおらかな心で受け止めることもあるだろう。このように、友達とは一生涯にわたって互いに影響しあい、互いを成長させていく存在である。

児童にとっても、友達とは家族以外で特に深い関わりをもつ存在である。いわゆる「ギャングエイジ」と言われる年代を境として、多くの人は似た能力や価値観をもった友達と行動を共にするようになる。親や教師に頼ろうとするそれまでの姿勢から、友達からの励ましや意見によって悩みを乗り越えたり、問題を解決しようとしたりするようになる。それまでの価値判断の基準は親や教師だったのに対して、ギャングエイジ以降はその基準を友達に求めるようになる。友達グループの結束は固く、時にはいたずらや悪さなどもしながらも成長していく。このように友達にこだわるような若い年代にとっては、「何でも打ち明けられる存在」こそが友達だとも言えるだろう。

しかし、友達関係は時として悩ましいものでもある。自分の言動しだいでよりよい関係を築くこともできれば、それまでの関係を壊してしまうこともあるからだ。この時期の児童は友達に価値を求めると同時に、友達で悩み苦しむ。だから、友達に対してどのような行動をとればよいかということは、唯一絶対というものはなく、その時々に最善な判断をしていくことが望まれる。

真の友達関係とは、互いの考えを包み隠さず言うことができる関係であること、そしてそれを素直に受け止められる関係であるということだと考える。それと同時に、相手のわがままや過ちですらも暖かく包んで上げられる関係でもあると考える。そんな良好な友達関係を築くには、相手のことを深く考え、思いやることが必要である。

人は児童期から友達と勉強したり遊んだりする中で、楽しいことやつらいことを経験していく。そんな経験を通して、人との接し方を学んだり、友達関係とはどうあるべきか、といったことを学んだりしていく。交友関係が広がる中学年のこの時期に、そういった経験をたくさんすることによって、相手の気持ちを察したり、相手の気持ちをより深く理解したりできるようになると考える。

（２）児童の実態

本学級は１年生のときから単学級である。ほぼ変わらないメンバーで学校生活を送ってきた。小学校生活だけではない。幼稚園も同じという児童も多い。気心知れた友達が多いせいか、３年生の時には（持ち上がりの学級）男子を中心として友達への暴言やからかいからトラブルに発展することが多かった。児童にとってはそういった状態が「普通」であり、「慣れている」というふうに感じられた。

本学級には合言葉がある。それは、「学校とは賢くなるところ」「学校とは仲良くするところ」という２つの言葉だ。

昨年度より、ことあるごとにこの２つを言って聞かせてきたため、児童に「学校は何するところ？」と聞けば、「賢くなるところ」「仲良くするところ」と答えられるようになっている。

また、「席替えはいろんな人と仲良くするために行う」といったことや、隣同士ちょっとでも席を離していたら、「２人は仲が悪いのですか」などと言ったり、道徳の授業などを通して、「いじめは犯罪だ」「先生はいじめを許さない」というような指導をしたりしている。

このようなことから、児童は「友達と仲良く過ごそう」という意識を常にもっているものと考えられる。

しかし、児童一人一人の友達との接し方は様々である。当番活動を例に取ると、友達が仕事をすっかり忘れて遊びにいってしまったときに、文句も言わずその仕事をサッとやってくれる児童がいる一方、「〇〇さん、仕事忘れているよ。」などと友達の間違いを注意する児童もいる。これは、単に児童の性格の違いによるものというふうにも考えられるが、一方で、友達の間違いに対して寛容な態度で対応することができる児童とできない児童がいるということ、もしくは友達に注意することしか対応方法を知らない児童がいるということも考えられる。このことによって、トラブルになることもある。

自分の考え、感じ方が絶対だと思い込みがちなこの時期の児童である。授業を通して、友達への対応の仕方はひとつではないということ、友達への忠告は葛藤を伴い、自分の言動によっては友達関係を更によくなることもあれば悪くなることもあるということを学ばせる必要があると考える。また、これから友人関係がより親密になってくるこの時期の児童に、友達を思いやり行動できることが真の友情であり、望ましい友達関係を築くために必要な態度であるということに気づかせたい。

さらにこの学習を通して、友達からの行為を受ける立場になったときにも、相手が自分にしてくれた行為は、相手が深く考えた末の行為であるということに気づかせたい。

（３）資料について

本資料「絵はがきと切手」は、主人公のひろ子が転校していった仲良しの友達の正子からきれいな絵葉書を受け取り、返事を書こうとする話しである。しかし、正子からの絵葉書は普通より大きめだったため、受け取った兄が不足料金を払わなければならなかった。ひろ子は返事を書こうとしたが、兄が言った「不足の事を教えてあげたほうがいい。」という言葉が気になった。母に相談すると、「お礼だけ言ったほうがいい。」と言う。兄は、さらに「言ってあげたほうがいい。それが友達と言うものだ。」と譲らなかった。この二つの考えの中で迷うひろ子だったが、しばらく考えた後、料金不足のことを書き足そうと決心するというものである。

この話の主題は、「本当の友達とは、信頼関係が土台としてあり、忠告されても腹を立てず受け入れられる存在である」ということだろう。

ひろ子は正子に対して忠告するという立場を選んだ。友達であるならば、そういったことも必要だろう。しかし、友達だからこそ忠告しないという選択肢もあるはずである。例えば、レストランの料理に髪の毛が入っていた場合、お店の人に言って料理を取り替えてもらうということはよくあるだろう。しかし、友人宅に招待され手料理を振舞ってもらい、そこに髪の毛が入っていた場合、それを指摘するということにはかなり抵抗がある。これは仲が良いがゆえに言えない、もしくは仲が良いからこそそんなことは気にしないというよい例だろう。

つまり、ひろ子は正子を思い、あえて忠告しないという選択肢もあるのである。これは友達を信頼していない行為ではない。友達のことを思いやる、立派な行動判断である。大人の世界でもよくあることであり、だからこそ人間関係が円滑になるという考えもあるのではないか。

だからこの資料を、あえて批判的に活用する。児童に、ひろ子の行動の是非を考えさせ話し合わせることで、ねらいとする道徳的価値についての感じ方や考え方を一層深めることができると考える。

４　研究の視点との関連

道徳的実践力を高めるための指導法の工夫

〇発問の工夫

主発問を、「料金不足分を友達に伝えようとするひろ子さんの行動に、賛成ですか。反対ですか。」とする。この発問によって、児童の意見が割れる。児童は、様々な意見に触れることで、自分の中にある「友情」という概念を更に深めることができると考える。そして、実生活で似たような場面に遭遇したとき、自分はどのように行動すればよいのかを判断するための一助となると考える。

また、発問を「賛成か、反対か」の二択にすることで、自分の立場を決定する力をつけさせる。賛成、反対で悩む児童もいるとは思う。しかし、「わからない」や「どちらでもない」など中途半端な立場にいつも身を置いていたら判断力はいつまでたっても育たない。実生活では、自分が責任をもって判断を下し、実行しなければならないからだ。本授業では二択だからこそ、自分の立場を明確にでき、自分の意見を友達にはっきりと表明できるのだと考える。

またこの発問による授業展開は、「道徳の教科化」を意識したものでもある。

小学校学習指導要領は平成２７年に一部改正された。そして平成３０年よりそれまでの道徳の時間は、「特別の教科　道徳」（仮称）として生まれ変わる。

「小学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編」第１章には改定の経緯が述べられている。これまでの道徳の時間における課題のひとつとして、「読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導」があげられている。そうではなく、「答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童が自分自身の問題と捉え、向き合う『考える道徳』、『議論する道徳』へと転換を図る」のである。

主人公の行動の是非を問う発問は、多様な価値観で対立する中で、自分は人としてどのように生きるべきなのかを、人としてよりよく生きる上で大切なものは何かを考えるのに有効であると考える。

また「小学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編」には、内容項目Ｂの「相互理解・寛容」の指導の要点として、「日常の指導においては、児童同士、児童と教師が互いの考えや意見を交流し合う機会を設定し、異なる考えや意見を大切にすることのよさを実感できるように指導することが大切である」と述べられている。日常的に意見交流できる学習を設定することは、児童が道徳的価値を理解するのにも必要なことと考えられる。

○資料の一部改作

原文では、ひろ子が「正子さんは、ほかの人にも、この大きすぎる絵葉書きを五十円で送るかもしれない」と考え、正子に対して忠告をしようと決意するとなっている。

この「正子さんは、ほかの人にも、この大きすぎる絵葉書きを五十円で送るかもしれない」という一文を削る。また、「だめ、だめ、ちゃんと言ってあげたほうがいいんだよ。それが友達というものだよ。」という兄の言葉がある。この、「それが友達と言うものだよ」も削る。

これらの文があると、児童の考えがひろ子の行動に「賛成」に傾くのではないかと考える。児童の意見から出てくるのはもちろん歓迎する。

本時ではあくまで、「考え、議論する道徳」によって道徳的実践力を高めたいと考えている。

また、現在は郵便料金が変更されているため、５０円を５２円に改める。よって不足料金も、７０円から６８円に改める。

5　本時の展開

（1）本時のねらい

正子の過ちを指摘しようとするひろ子の行動の賛否を考えることを通して、友達のことを思い行動するときの判断力を高める。

（2）本時の展開

学習活動と内容	教師の支援・留意点（○）、評価（◇）
1　郵便物を送るには、大きさによって決まった金額の切手を貼らなければいけないこと、もし料金が不足している場合は受取人が払わなければならないこともあることを知る。	○資料の理解が深まるよう、郵便の仕組みを解説する。 ○大型テレビを使い、視覚的に理解できるようにする。
2　教師の「絵はがきと切手」の範読を聞き、資料の内容を知る。 一言で言うと、どんな話ですか。 ・ひろ子が友達の正子に大きな絵葉書には１２０円の切手を貼らなければならないことを伝える話。	○児童が一度で資料を理解しやすいように、はっきりと範読する。 ○資料の大まかな内容を確認することで、児童全員が資料の要点をつかむことができるようにする。 ○児童が的確に答えられなかった場合は、教師が補足する。
3　兄と母の意見を確認し、ひろ子の葛藤について理解する。 お兄さんは友達の正子さんに、５２円切手ではなく１２０円切手を貼らなければならないことを教えてあげたほうがよいという考えですね。	○兄と母の意見を確認することで、ひろ子が異なる２つの考えで葛藤しているということを理解させる。

お母さんは、お礼だけ言ったほうがよい、つまり、料金が足りないことは言わなくてよいという考えですね。 ４　ひろ子の行動に賛成か反対か考え、話し合う。	
料金不足を友達に伝えることにしたひろ子さんの行動に、賛成ですか。反対ですか。	
○賛成の児童はノートに○、反対の児童はノートに×を書き、理由を書く。	○ノートに書くことで、考えた自分の意見を書き留めさせる。そうすることで、後に発表するときに意見を表明しやすくする。 ○理由が短い児童には、いろいろな考えから書くように助言する。
○ノートに理由を書けた児童から、黒板に書く。 賛成 ・相手に足りない６８円を出させるのは失礼だから。 ・友達が間違えているのだから、教えてあげるのは当然だから。 ・これから先も正子さんが、いろんな人に間違って送ってしまっては、正子さんがかわいそうだから。 反対 ・自分が言わなくても、他の誰かが言ってくれるかもしれないから。 ・正子さんがせっかく心をこめて手紙をくれたのだから、わざわざ言う必要はないと思うから。 ・友達だから、そんな小さなことは気にしない。許してあげるのも友達だと思うから。	○黒板には、簡単に書くようにさせる。 ○黒板に書かせることで、ノートに早く書き終わった児童の時間調整とする。また、理由を書くことができない児童のための手本とする。 ○黒板に書かせる児童は１０名程度とする。 ○時間調整のため、書き終わった児童同士で意見交換をさせる。
○意見を発表する。	○友達に意見がよく伝わるよう机を教室の中央に向けさせる。 ○少数派の意見から言わせる。その後、多数派の意見を少数派と同数言わせる。

○討論をする。 ・反対です。そんなことを言ったら正子さんは傷つきます。 ・賛成です。正子さんは間違えているのだから、教えてあげるのは当然のことです。 ・賛成の人に質問です。友達の正子さんを傷つけてしまってもいいのですか。 ・正子さんはひろ子さんの友達です。仲のよい友達なのだから、正子さんは分かってくれるはずです。 ・反対の人に質問です。正子さんがずっと知らないままで、これからも料金が足りないまま絵はがきを送り続けてもいいのですか。	○賛成→反対→賛成…の順に意見を言わせることで、話題が続くようにする。 ○討論中はノートに友達の意見や自分の意見を書くよう助言する。 ○なるべく多くの意見に触れることができるよう、いろんな児童が発表するよう促す。 ○仮に全員がどちらかの意見になった場合は、互いの意見に質問をさせたり、友達の意見に付け足したりして更に意見を高めさせる。 ○討論が本筋から外れそうになったときには、教師が軌道修正する。 ○ひろ子さんが正子さんになぜ教えてあげようと思ったのかを考えさせる。 ○友達のために心をこめて送ってきた絵はがきの返事に、料金不足のことを書くことが友達として正しい行動なのか考えさせる。 ○正子さんのことを思った意見は特に教師が取り上げる。 ○最後に意見を一度も発表していない人に発言させる。 ◇ひろ子さんの意見に賛成か反対か自分の立場を決め、友達の正子さんのことを考えた理由を考えることができたか。（ノート）
5　再度、賛成か反対かノートに書く。 ○賛成の児童はノートに○、反対の児童はノートに×を書く。	○賛成、反対の人数を確認する。 ○人数の多いほうが正しいということではなく、自分の意見を書いたこと、討論で発表したことが大切だということを強調して伝える。 ○自分と意見が違うということで、授業後に友達を否定することはいけないことを伝える。
6　授業の感想を書き発表する。 ・ひろ子さんにとって、正子さんは大切な友達なのだから、正子さんの間違いをちゃんと伝えられるのは正子さんしかいないと思います。自分も友達が間違ったことをしてしまったときは、教えてあげるようにしたいです。 ・実際に自分がひろ子さんの立場だったら正子さんに言えるかどうかは分かりません。でも正子	○感想が短い児童には、友達の意見も参考にして書くように助言する。 ○今日の授業で学んだことを書くよう助言する。 ○すべての感想を肯定的に聞く。

さんがこれからもずっと間違った切手をはって絵はがきを出し続けたら、正子さんがいろんな人から嫌われてしまうかもしれません。そうならないように、ひろ子さんが言わなければならないと考えました。友達のことを思えば、ちゃんと言わなければいけないこともあるんだということが分かりました。 ・友達のことを考えると、どうしたらよいのか悩みました。どちらも友達のことを考えた意見だったからです。わたしも友達のことをよく考えて行動していきたいです。そうすればもっと友達と仲良くなれると思いました。 ・「正子さんはこのまま知らずに絵はがきをいろんな人に間違って出し続けるかもしれない」という友達の意見を聞いて、確かにそのとおりだなあと思いました。しかし、お礼の手紙にそのことを書くことは反対です。わたしも前に似たようなことがありましたが、ちゃんと口で伝えました。 ・どちらがいいのか正直分かりません。自分も友達が同じようなことをしていたときに、どうすることが一番いいのかもう少し考えてみようと思います。	

6　板書計画

料金不足を友達に伝えることにしたひろ子さんの行動に、さんせいか。はんたいか。

さんせい

・足りない六十八円をはらわせるなんてしつれいだから。
・ほかの人にもまちがって送ってしまっては、正子さんがかわいそうだから。
・正子さんがいろいろうだから。

はんたい

・料金不足のことを書いたら正子さんが悲しい気持ちになると思うから。
・それくらいのこと友達なのだから気にしないほうがいいと思うから。

絵はがきと切手

「ゆうびんです。不足料金、お願いします。」
げんかんの方から、声が聞こえてきました。
ひろ子が出ていこうとすると、ちょうど高校生の兄が帰ってきました。
「68円足りません。」
ゆうびん屋さんは、こう言って、兄に1まいのゆうびん物をわたしました。
兄は、それを受け取って、ゆうびん屋さんに68円わたしました。兄は、ゆうびん物をひろ子にわたしながら、「受け取り人に、お金をはらわせるのは失礼だな。こんなに大きいのは、ゆうびん局では、はがきとしてはあつかわないんだよ。定形外ゆうびん物といって、120円の切手をはらなければいけないんだよ。その人は、ひろ子の友達だろう。教えてあげたほうがいいよ。」
と言いました。
それは、9月の初め、転校していった正子から来たもので、ふつうのはがきよりは大きめの絵はがきでした。
ひろ子と正子は、1年生のときからの仲よしです。
はがきには、次のように書いてありました。

> ひろ子さん、お元気ですか。
>
> わたしは、このあいだ、蓼科(たてしな)高原に行ってきました。そのときの景色が、とても美しかったので、お送りします。来年の夏休みには、ぜひ、とまりに来てください。

そして
「料金不足　68円　松本局」
と書いたゴム印がおしてありました。
左上には、52円の切手がはってありました。
ひろ子は、高原を歩いている正子のことを考え、「わたしも行ってみたいなあ。」と思いました。
返事を書こうと、紙とえんぴつを用意しました。すると、さっき、兄の言ったことが気になってきました。
正子が、せっかくきれいな景色を見せたいと送ってくれたのに、「68円の不足でした。」なんて書きたくなかったのです。そんなふうに書いたら、正子がきっといやな気持ちになると思いました。台所で食事の用意をしていた母に、相談してみました。
「お礼だけ言っておいたほうがいいかもしれないね。」
と、母は言ってくれました。しかし、兄が、そばでそれを聞いていて、
「だめ、だめ、ちゃんと言ってあげたほうがいいんだよ。」
と言って、ゆずりません。
ひろ子は、まよってしまいました。
自分の部屋にもどって、一人でいろいろ考えているうちに、正子とすごした日々を、なつかしく思い出しました。
ひろ子は、手紙の最後に、120円切手をはらなければならないことを書き足そうと思いました。
――正子さんは、きっと分かってくれる。
そう思って、手紙を書き始めました。